

【ポスター発表】

福祉系大学生のボランティア活動と障がい者に対する態度

ーコロナ禍の前後による比較ー

○ 金城大学 氏名 岡村 綾子 (003446)

キーワード：コロナ禍，ボランティア活動，障がい者

1. 研究目的

開学以来大学生のボランティア活動と障がい者に対する態度について調査を行い、ボランティア活動や障がい者に対する態度の変化について、障がい者に関する図書の読書、や障がい者に関する映画やビデオの視聴の影響について検討してきた。さらに福祉系と医療系の学生による障がい者に対する態度の違いについても検討してきた。先行研究においても障がい者に対する態度について、授業や実習の影響、ふれあい体験の影響、障がい者との交流経験の影響、ボランティア活動の影響などの研究^{1)~4)}がおこなわれている。ところが、新型コロナウイルスによるパンデミック化した情勢に世の中が遭遇した。この情勢により大学の授業もオンラインで行われ、実習も代替演習で行われたことに加え、ボランティア活動の受け入れも低調になった。そこで継続して調査を行ってきたボランティア活動や障がい者に対する態度へのコロナ禍の影響について検討することにした。

2. 研究の視点および方法

(1) 調査協力者 A福祉系大学の2019年度2年生137人、3年生120人、2022年度2年生121人、3年生102人を調査協力者とした。

(2) 調査内容 質問紙調査は自記式集合調査とし、質問は、障がいをもつ人に関する読書の影響、障がいをもつ人に関するテレビ等の視聴の影響、日常生活における障がいをもつ人に対する態度、障がいをもつ人だと考えた根拠、初めて障がいをもつ人と関わった時期とその人が障がいをもつ人とわかった理由、小・中学生に障がいをもつ人について説明する内容、障がいをもつ人について「ほんね」や「たてまえ」で説明する内容などとした。小・中学生に対する障がいをもつ人についての説明する内容、障がいをもつ人について「ほんね」や「たてまえ」で説明する内容を問う質問には選択肢として説明事項が用意され、複数選択可とした。

(3) 調査手順と調査用紙の回収 いずれも前期のオリエンテーションの機会を利用して質問用紙を配布し、自記式集合調査を行った。質問紙調査用紙については、2019年度2年生は137人に配布し、128人から回収でき(回収率93.4%)、3年生は120人に配布し、109人から回収でき(回収率90.8%)、2022年度2年生は121人に配布し、95人から回収でき(回収率78.5%)、3年生は102人に配布し、93人から回収できた(回収率91.2%)。有効回答数は、2019年度2年生73人(有効回答率53.3%)、3年生61人(有効回答率50.8%)、2022年度2年生73人(有効回答率60.3%)、3年生55人(有効回答率53.9%)であった。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理規定に基づいて実施した。調査協力者には、研究の趣旨を説明し、得られたデータは研究目的以外には使用しないことについても説明した後に調査への参加を要請し、調査参加をもって研究協力受諾とした。また、調査結果の検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。本研究は金城大学研究倫理委員会の承認(第29-15号, 第2019-06)を得た。本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

4. 研究結果

ボランティア活動の経験に関しては、大学入学以前について、2019年度の2年生は72.8%の学生が、3年生は73.8%の学生が、2022年度の2年生は79.5%の学生が、3年生は63.6%の学生が経験ありと答えた。大学入学以後について、2019年度の2年生は78.1%の学生が、3年生は83.6%の学生が、2022年度の2年生42.5%の学生が、3年生は7.3%の学生がボランティア活動の経験ありと答えた。障がい者に対する態度に関しては、大学入学以前について、2019年度の2年生は33.0%が、3年生は25.9%が、2022年度の2年生は17.9%が、3年生は37.5%が理解不足を示した。大学入学以後について、2019年度の2年生は8.4%が、3年生は5.1%が、2022年度の2年生は2.1%が、3年生は7.4%が理解不足を示した。

5. 考察

ボランティア活動の経験に関しては、入学以前の経験はコロナ禍前に入学した学生とコロナ禍に入学した学生との間に著しい違いは認められなかった。入学以後のボランティア活動の経験はコロナ禍前に入学した学生とコロナ禍の下に入学した学生との間に著しい差が見られた。障がい者に対する態度に関しては、大学入学以前における理解不足を示す割合は多少の違いを認められたが、大学入学以前における理解不足を示す割合についてはほとんど差がみられなかった。ボランティア活動によって障がい者に対する理解が深まると考えられていたが、今回の調査からはボランティア活動によって障がい者に対する理解が深まったとは言えなかった。

文献

- 1) 伊東由賀・山崎美晴・永利美花・山村礎 (2005) 精神障害に対する看護学生の態度の変化. 日本保健科学学会誌, 7 (4), 241-249.
- 2) 守屋みゆき (2003) 看護学生の精神障害(者)に倒る理解の変化(第1報)—3年次精神看護学実習前後の変化—. 東京医科大学看護専門学校紀要, 13 (1), 13-21.
- 3) 木船憲幸 (1986) 精神薄弱児に対する普通児の態度と交流経験との関係. 特殊教育学研究, 24 (1), 11-19.
- 4) 桐原宏行 (1999) ボランティア活動の経験が障がい者に対する態度に及ぼす影響. 障害理解研究, 3, 15-20.